



先生たちも学んでいます part2

本日(月)は、校内研修で、学級活動内容(3)と道徳科の授業づくりについて職員全員で学び合いました。まず、学級活動では、運動会や音楽会でいかにして効果的なめあてを子供たちに立てさせるかを学び合いました。運動会や音楽会などは、慌しい中で取り組むため、子供たちの中では「がんばった」という実感はあるもののそれが具体性に欠けるため、どんな力が付いたのか分からないまま過ぎ去っていきます。しかし、なりたい自分になるために「めあて」を立てて実践する学級活動内容(3)によって、個人として学級としてどんな力が付いたのかを実感させることができます。それが、子供たちの自信を生むのです。



次に、道徳科では、先生たちが子供役になったり先生役になったりしながら、道徳的価値の自覚を深めるためにはどのような方法があるか学び合いました。そして、子供たちの力を信じ、子供たちが主体的に議論しながら価値に気付いていく方法について意見を出し合いました。

今回の校内研修も、本校職員の学び合いの姿勢によって、学校がさらに「わくわく」する学校に近づいていると思いました。

情けは人のためならず

「情けは人のためならず」とは、「人に情けをかけるのは、その人の為になるばかりでなく、やがては巡り巡って自分に返ってくる。人には親切にせよ。」という教えです。最近、日本でも地震が頻発し、穏やかな心境にはなれませんが、5万人以上が亡くなったとされるトルコ・シリア地震から、3か月以上が経ちました。



東日本大震災では、関連死を含めた死者・行方不明者は、約2万人ですからトルコ・シリア地震の被害の大きさがわかります。この地震の発生直後から日本も救援隊が駆けつけています。医療チームの一人は「恩返しをしたい。」と話しています。実は東日本大震災の時、トルコは約3週間にわたって救助チームを派遣してくれました。このトルコと日本との関係は、130年以上前にさかのぼります。1890年に明治天皇に謁見して帰国するオスマン帝国(一部が現在のトルコ)の軍艦エルトゥールル号は、暴風のために、和歌山県大島村沖で沈没してしまいました。村人の懸命な活動で69人が助かり帰国を果たすことができました。トルコでは、小学校の教科書に載るなどして語り継がれています。

エルトゥールル号の遭難は誠に痛ましい悲劇でしたが、日本人の救援活動はトルコ本国に伝えられ、トルコ国民の心の中に日本に対する親愛と感謝の念を根付かせるきっかけとなりました。この原稿を書いていると、現在開票中のトルコ大統領選挙の報道が気になってきました。